

経営者の「元気!」を応援する
朝日生命経営情報マガジン



8
AUG. 2004

通巻100号記念

本物か!? 日本経済復活

欽ちゃんが熱く語る
喜劇王 チャップリン
萩本欽一 タレント



私の経営歳時記
株式会社丸政
名取政仁

月刊「ABC」掲載記事一覧
2000年1月号～



「専門外来／漢方外来」

漢方薬を愛用している人も多いのではないだろうか。ただ、漢方薬には独特の診断方法があり、効果を期待するなら専門医に診てもらったほうがいい。慶應義塾大学病院で漢方外来を担当する渡邊賢治助教に、現代医学における漢方の役割などについて聞いた。

漢方治療の適応を見極めることが大事

漢方薬に健康保険が適用されたのは1976年。すでに30年近くの歴史があり、いまや7割以上の医師が医療現場で漢方薬を処方しているとの調査がある。一方で、「体にやさしい医療」とされてきた漢方薬も副作用が取りざたされるなど、使い方によっては安全性に問題があることもわかってきた。とはいえ、西洋薬に比べると副作用は少なく、現代医学では対応しきれない不定愁訴などにも有効なことから、患者や医師の間で漢方薬の人氣は着実に高まっている。

慶應義塾大学病院漢方クリニックで漢方外来がスタートしたのは1992年。外来を担当する渡邊賢治助教は、「開設当初から患者さんは多かったのですが、今では老若男女を問わず、乳児から高齢者まで幅広い年代の人が受診しています。治療の対象となる病気も胃腸障害、アレルギー疾患、産科・婦人科疾患、心身症や自律神経障害、老化に伴う前立腺肥大、しびれ、膝痛、高血圧や糖尿病といった生活習慣病などさまざまです。漢方はどういう病気に効くかと聞かれることも多いのです。

慶應義塾大学医学部
東洋医学講座助教

渡邊賢治

わたなべ けんじ。1959年生まれ。84年慶應義塾大学医学部卒業。同内科学教室、東海大学医学部免疫学教室、米国スタンフォード大学遺伝学教室留学を経て、95年北里研究所東洋医学総合研究所漢方診療部へ。2001年から現職。漢方クリニック診療部長も兼任。

では伝統医学と現代医学の医師は別ですが、日本は現代医学の教育を受けた医師が漢方薬を使っています。そういう意味で、両者を組み合わせることができるのは日本だけです。漢方治療を受けるときは、漢方薬に詳しいだけでなく、西洋医学と漢方医学の知識を持ち、両方を同じ土台にのせて、うまく組み合わせることができると医師に診てもらったことが大事です」

同じ症状でも個々で処方が違う

漢方治療を受ける場合、現代医学とはまったく違う診断方法に戸惑う人もいるかもしれない。漢方医学には個々の体質を重視する「証」という独自の診断基準がある。代表的なのが「虚実」だ。すなわち、比較的体力があり、がっちりした体格で胃腸も丈夫という人は「実証」、体力がなく胃腸も弱く、顔色が青白いといった人は「虚証」と診断される。「中間証」もある。

「証」によって使われる漢方薬が異なるので、同じ症状であっても違う処方を選ばれたり、異なる病気に同じ処方が使われたりします。ここが、病名に対して薬が投与される西洋

医学と大きく違うところです。例えば、風邪には葛根湯（かっこんとう）、桂枝湯（けいしとう）、麻黄湯（まおうとう）など数多くの処方が使われますし、逆に八味地黄丸（はちみじおうがん）は高血圧、腰痛、前立腺肥大症、耳鳴りといった複数の病気に用いられます。友人などから、いい漢方薬があるからと薦められることもあるでしょうが、その人に効いたから自分にも効くという保証はありません。その点は注意が必要です」

また、漢方医学には「気・血・水（き・けつ・すい）」という仮想的病因論もある。気は形のないもの、血は血液、水は血液以外の体液全般を指し、この3つの流れが体内で滞ったり、偏在することで、さまざまな障害や疾患を起すと考えられている。気虚の異常を例に挙げると、「気虚」「気鬱」「気逆」がある。気虚は根源の気（元気）が全身的に不足している状態とされ、体がだるい、疲れやすい、息切れがするなどの症状が見られるといった具合だ。気の異常か、血の異常か、水の異常かによっても使われる漢方薬は当然異なる。

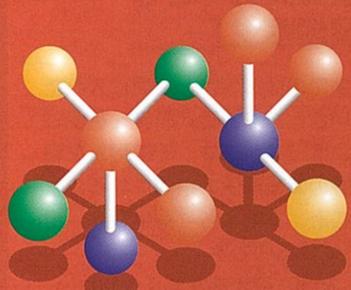
「一般の医師が漢方薬を使うときは、こうした漢方独特の

第61回

がんばるあなたの健康クリニック



医師の7割以上が漢方薬を処方
検査値にあらわれない不定愁訴などにも対応



が、基本的にどんな病気にも対応できるといういいですよ」と話す。

ただ、漢方薬といえども万能ではないことも覚えておきたい。例えば、がんや腫瘍などの手術が必要な病気、抗生物質が有効な感染症、急性腎不全や急性心筋梗塞といった緊急処置が必要な病気が、漢方薬単独では治せない。「大事なことは、病気や症状によって漢方治療がいいか現代医学が有効かをきちんと見極めること」と渡邊助教。

現代医学の隙間を埋める漢方治療

では、漢方薬は実際の医療現場でどのように使われているのか。渡邊助教によると、漢方治療の大事な役割の1つは現代医学の隙間を埋めることだといふ。

現在、病気の発見に威力を発揮しているのは検査だ。ところが、頭痛や動悸などを訴えても、検査をすると異常が見つからないことがある。このような場合、現代医療では「気のせい」などと片づけられるケースが少なくない。検査に異常が出ない症状や訴えに対しても、漢方薬ならばきちんと対応できる。

診断方法がネックになることがあります。自分に合った漢方薬を処方してもらうためには、やはり漢方薬に詳しい専門医に診てもらったことが必要でしょう」

最近では、全国の医療施設で漢方外来を開設しているところや、漢方を専門とするクリニックも増えてきた。漢方に詳しい医師を探すには、インターネットなどを活用するの1つの方法だ。

予防医学や医療費削減に役立つ漢方薬

ストレスなどの影響で病気とはいえないまでも、何となく体がだるいといった体調不良を訴える人も増えている。渡邊助教は、こうした人にも漢方薬が役立つと話す。

「漢方医学では、『未病（みびょう）』という概念があって、病気になる前に治すのが最高の医者とされています。漢方薬には免疫力をアップさせて風邪をひきにくくさせるなどの効果がありますから、予防医学という面からも期待されています」

ストレス社会で増えている病気の1つが、うつ病。軽症のうちは、疲れやすい、不眠

「典型的な例が不定愁訴や更年期のさまざまな症状です。頭痛やイライラ、疲れやすいなどの症状があっても検査で異常が見つからず、納得できずにドクター・ショッピングをして、次々と病院を替える患者さんもいます。そんなときこそ漢方薬の出番です。漢方薬なら1つか2つの処方多彩な愁訴を改善できます。婦人科で漢方薬がよく使われるのはそのためです」

漢方薬の使い方ももう1つ重要なのが、西洋薬との併用だ。例えば、がん患者では抗がん剤や放射線治療の副作用に苦しむことが多い。最近抗がん剤と漢方薬を併用することで、副作用を軽減できることが実証されている。アトピー性皮膚炎も現代病の1つだが、湿疹や痒みなどの症状はステロイド外用薬で抑え、漢方薬で根本的なアレルギー体質の改善を目指すという治療も成果をあげている。さらに手術後に大建中湯（だいけんちゅうとう）という漢方薬を使うと術後の回復が早まり、入院日数も短縮できるというメリットもあるそうだ。

「当院は全国で一番平均入院日数が少ない大学病院です。これも漢方の併用効果といえるでしょう。中国や韓国などの身体症状が前面に出てくることがある。こうした症状も漢方の得意分野なのだ。ちょっとおかしな思っても精神科に行くのは少しためらわれる。そんなときは漢方外来を受診してほしい」と渡邊助教は勧める。

最近では、医療経済の面からも漢方薬が注目されている。高齢者では複数の病気や訴えを持っている人が多い。その1つ1つの訴えに対応するには、西洋薬では自然と薬の種類が増える。1つの薬で多様な症状に対応できる漢方薬ならば、結果的に医療費削減につながるというわけだ。

「漢方薬でカバーできない病気が少ないといっているように、本人に辛い症状があっても、漢方薬が効くかどうか迷っているのであれば、まず相談してほしい」と渡邊助教は話している。

慶應義塾大学病院漢方クリニック
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35
TEL. 03-3353-1211
診療受付時間
初診 8:00~11:30
再診 午前予約がある人は 8:40~11:00
午後予約がある人は 11:00~来院指定時刻
初診時は予約なし